

## 高窪さんと私

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学短期大学 公開日: 2013-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立石, 芳枝 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/15984">http://hdl.handle.net/10291/15984</a>

# 高窪さんと私

立石芳枝

高窪さんと私は、戦前の旧称明大女子部に入学以来、机を並べた間柄で、このたび高窪さんが定年となられ、わが短大専任教授の地位を退かれるにあたり、一文を草するについては思い出は尽きず、まったく感無量というほかはない。偶然に名簿の順も高窪立石と続くところからか、私は知らぬ人から高窪さんと呼ばれたり、またそれぞれの自宅も、東京青山の豪壮な高窪邸が戦災で一燼に帰し、高窪さんが大宮に移られてからは、私の浦和宅と同じく埼玉県、といったことによるのであるまいけれど、年賀状に立石静江様とあったり、学生が出した高窪先生宛の賀状が、浦和番地で私に届いたことさえある。

女子部時代は、現在の3号館からは想像を絶する簡素（簡粗？）な木造二階建て校舎で、教室の机は細長い一枚続きの板に二人ずつ並ぶようになっており、最前列が高窪さんと私の席であった。ある日のこと授業の最中、その一枚板の下に手を突っ込んでキャラメルの紙を剥こうとして私は、ガッチャンと机を教卓の前に引っくり返してしまった。教壇の先生には、私が返したのやら隣りの高窪さんが返したのやら分らない。私と組んだばかりに、その他いろいろ高窪さんが被害を受けられたのではなかったろうかと、今におよんで内心忸怩たるものがある。

津田英学塾をトップ卒業が喧伝された高窪さんは、クラスメイトとはいえ一同とは格が上で、女子部二年生の時すでに英語の講師をされた。後年ライフワークに選ばれた商法は、法律評論社創始者の亡父君高窪喜八郎先生直伝の、お家芸である。まことに、才女の誉れ高く加えて毛並み抜群という次第で、また私に対する高窪さんの態度には、姉が妹に対するその

ような、私を甘えさせる何かが、いつも私に感じられる。

高窪さんは法律のほか英語もずっと持たれ、法律だけの私と違って経済科学生にも馴染みがあり、そこで高窪さんの経済科長に私の法律科長というコンビで戦時中は、赤羽の、戦後に団地となっている陸軍被服廠へ、勤労働員の学生に付き添って通った。軍関係の廠舎であるだけ爆撃目標になる危険率は大きく、小爆撃は昼間しばしば受けたが、大爆撃は夜間だったため、全員無事で終戦を迎ええたものの、オーバーに言えば、高窪さんと生死を共にした時期もあったのである。

古い話ほど読者には興味があると思われるので、，なお一つ二つ昔のことを書き記すと、私は女子部在学中たいていセイラー服で通したが、風邪気味のある日フワフワと温かい本ネルの元禄袖を着て行ったら、出会いがしらに高窪さんが、「うぶ着を着て来たね」といった。その当意即妙は忘れられない。高窪さんは常に和服で、海老茶の袴を新派の舞台のように胸高ではなく、低く目に裾短かに、そして雨が降ると、今も流行っている色繻子の、ぼったりした衿の雨コート、あんなものは決して着用されず、生地はゴリッとした木綿紺緋、衿元は四角い道行き。じつにキリキリシャンとした姿であった。その容姿はそのまま、よく私が評する「竹を割った」ような、スカッとした高窪さんの性格に相通ずる。

右顧左眄しない高窪さんの持ち味が、やはり私は好きである。思うことをズバリ述べ、損を承知で後へ引かない。神田下町の学舎ながら江戸っ子の気っ風は、昨今ほとんど周囲から影を潜めたように見える。わが短大高窪教授は、まさにその香りをとどめる最後の一人かもしれない。